

ロビンさんの
音楽
エッセイ②

Family
「みんなファミリー」

チベットに古くから伝わる教えでは、人は何度も生まれ変わって生きるの
で、道ですれ違うすべての人はかつての人生で、自分の両親または子どもで
あったという。

1日でもいいので、この教えをしっかりと頭にとどめてみてください。そうし
てみると、きっと世界が驚くほど違って見えたり、感じられたりすると思いま
す。周りの人に対して、あたたかくて誠実な思いを抱きやすくなるような、心
の深い所から思いやりがわいてくるような、他人（いや、すでに他人ではない）
に手をさしのべることが当たり前になるのです。気持ちの良い笑顔や、思い
やりのあるひとこと、握手やハグなどの簡単な挨拶を交わす中にも、今まで
以上の喜びを感じることでしょ。なぜなら、周りに誰一人として初めて「出
会う」人なんていないから。かつて、どこかで彼らと出会っていて、それど
ころか、とても近い関係だったことがある人たちだから…。



この人生ですれ違う人々が、他人のままであろうが、知り合いになろう
が、クラスメイト、同僚、親戚、親友、恋人、ともだち、敵のどれになっても、
誰もが過去・現在・未来のいずれかにおいて、ふたたび「ファミリー」になれ
るのです。冒頭の宝石のようなチベットの智恵が示してくれるように…。世界
は、過去も現在もこの先もずっと変わることなく、こうして流れていくのです。



●ロビン・ロイド（ミュージシャン・音楽セラピスト）
イリノイ州（USA）出身。大学卒業後、アジアを拠点に活動。50カ国以上
を旅し、そこで出会う原生林や熱帯雨林、山や川、砂漠、鳥の声、動植
物などからインスピレーションを得る。カリンバ、笛、尺八、三線、パー
カッションなどさまざまな民族楽器に囲まれ、マルチ・プレイヤーとしての
評価が高い。お年寄りや障がいのある人たちのための音楽セラピーの実
践と普及にも努めている。
<http://www.robbin-muse.info/index.html>

石田教授の コミュニケーション モノローグ 2

「表現された言葉、
表現されない気持ち」

先日、近所で葬式があった。回覧板
で回ってきた葬儀の案内には「香典
を辞退」と書いてあった。最近よくあ
るパターンなので、香典を持たずに
葬儀場に行った。焼香の順番を待つ
ていたら、近所の人「香典しはりま
した？」と聞いてくる。「いや、辞退と書
いてあったから持ってきていない」と
答えると「私も持ってきていないんだけど、受付で出した人がいて、受け取
ってはった」というのである。相談をして、後日家人に持って行ってもらったのだが、
ちゃんと受け取られてしまった。



手をつないで山登り。「私のほうを強く握って」

同じ頃、子どもたちとキャンプに行った。とても意地悪な子がいて、驚いた。小
学校3年生の女の子なのだが、同じグループの子どもたちに次から次へ意地悪
をする。お菓子を隠して知らん顔をしりするるのである。

好きな人に好きだといえない、反対に、興味を引くようにちょっと意地悪をしてみ
る、というようなことはよくあることだ。言っている言葉と中身が違うのである。葬
式の場合、ほんとは欲しいけれど、いい恰好を試みたかったのだろうか。女
の子の場合、グループ内の小さい子に優しくしてやりたかったのだが、その小
さい子が自分の方を少しも向いてくれないというのが原因だったらしい。自分に正
直に心と言葉が一致するというのはとても難しい。だから、人と話をするときには、
言葉の理解力と合わせて想像力が必要なのだろう。KYと言われないために。



●石田 易司（いしだ やすり）
桃山学院大学社会学部社会福祉学科教授。1948年生まれ。京
都府立大学文学部卒業。京都府立木津高等学校教諭を経て
朝日新聞社入社。厚生文化事業団で社会福祉・青少年育成事業
を担当。1998年から現職。その他、大阪市いきいきエイジングセ
ンター館長、大阪市ボランティア情報センター所長、日本キャン
プ協会常務理事、日本福祉文化学会副会長など。

Column 連載エッセイ

字を線と捉える
美的センスは抜群・川上瞬君

ゆきえ先生の
明るい
教室出席簿②



いつも元気で笑顔が絶
やさな川上瞬君は、教室
にお母様と自転車に乗って
風のようにやって来て、風
のように帰ってゆきます。そ
のリズムカルなこと…。書も
同じで、実に軽快。言葉は
しゃべれないし、字も書け
ませんが、字を線として捉
える見事なバランス感覚と

抜群の美的センスには、ただただ脱帽するしかありません。

5年前（2006年6月）、瞬君の一人展のときに、見知らぬ初老の男性が
「川上瞬先生はどちらですか？」と勢いよくドアを開けて入って来られました。
うかがうと、「毎日書道展」に毎年のように入選しているけれど、特選と
なるとなかなか頭打ちで獲ることができない…書道用品店で瞬先生の案内
状をみて、とても刺激を受けたのでここにやって来た…とのことでした。初
老の書家は、瞬君をある程度の年齢の書家としてイメージされていたらし
く、彼が若く（当時22歳）、しかも障がいのある人だと知って、とても驚かれ
ていました。彼は、瞬君の金文の篆書の作品をとても気に入られて、ご購入
してくださいました。

初老の書家は、次の「毎日書道展」で、見事に特選を獲得。瞬君の作品
でなにかをつかまれたのかな、と思うとうれしい限りです。

●山下 雪枝（やました ゆきえ）
書道教室「蛭」主宰。1949年生まれ。書家・古谷蒼韻に師事するも33
歳の時に変形性股関節症のため右足を手術、約1年の入院の後、松
葉杖の生活となり師事を断念。10年間の痛みとの闘いの後、1994年
より書や墨アートの創作のかたわら自宅で書道教室を開く。2002年
より豊中市蛭池公民館で書道教室「蛭」を主宰。10年にわたって知的障
がいのある人たちと歩み続けている。



木島英登の
空飛ぶ車イス②

滝つぼで、みんな、
興奮と感動のるつぼに。

瀑布イグアス。滝幅はなんと4キロ。滝に近づく遊歩道は階段。エレベ
ーターもあったが故障中。残念だと落ち込んでいたら、アライグマが足元に
きて癒してくれる。上流の展望台にはスロープがあり、滝を近くで見ること
ができた。帰り道、滝つぼへボートで行くツアーがあるのを発見。車イス
に乗っているのに、普通にチケットを売ってくれた。

遊園地の乗り物みたいなジープに乗
て本物のジャングルを走る。乗り移りし
やすい助手席に座らせてくれる配慮にプ
チ感動。船着き場へ到着すると、長い階
段が待っていた。どうしたものかと不安
がよぎるが、二人の係員が、ひよいひよ
いと両脇から担いで降ろしてくれた。12人
乗りのボートは、激しく揺れながら急流を上っていく。滝には何本もの虹が
かかっているが、美しいと楽しむ余裕はなし。ふるい落とされないように必
死にボートにしがみつく。轟音で船頭さんの声は聞こえないが、いよいよ滝
つぼへ突入する。圧倒的な水量で、目も開けられない。たらいの水を浴びた
ように全身ずぶ濡れ。パンツまでビチョビチョ。すごかったと安心したのも東
の間、同船のブラジル人グループがノリノリで、船頭を煽り、ボートは何度も
滝つぼへと突っ込んでいった。その度に悲鳴が響く。

川に落ちたら命が危ない緊張感。キャーキャーと一緒に叫んで、ずぶ濡れ
になれば、一体感から仲良しに。帰りの階段は、同志となったブラジル人達
が担いでくれた。興奮と感動の共有。優しく陽気なブラジル人。これだから
旅はやめられない。



●木島 英登（きじま ひでとう）
ビッグ・アイ国際交流アドバイザー。
世界100ヶ国以上を訪問。車いすの旅人。
<http://www.kijikiji.com/>

